左側舌根部に発生した類表皮嚢胞の1例

藤井 智子¹⁾・大西 祐一¹⁾・渡辺 昌広¹⁾
奥 佳葉¹⁾・和唐 雅博²⁾・覚道 健治¹⁾

A case of epidermoid cyst arising in the left side of the root of the tongue

FUJII Tomoko¹⁾・OHNISHI Yuichi¹⁾・WATANABE Masahiro¹⁾
OKU Yoshiha¹⁾・WATO Masahiro²⁾・KAKUDO Kenji¹⁾

Abstract: Dermoid cyst and epidermoid cyst usually arise as midline swellings in the floor of the mouth. We report a rare case of epidermoid cyst that arose in the left side of the root of the tongue. A 47-year-old man was referred to our department because of a painless mass in the left lateral aspect of the root of the tongue. Clinical examination showed an exophytic mass measuring 6 × 4 mm near the left lingual tonsil. Excisional biopsy was performed with the patient under local anesthesia. Histopathologically, the mass was diagnosed as an epidermoid cyst. No recurrence has occurred as of 1 year after excision.

Key words: epidermoid cyst (類表皮嚢胞), dermoid cyst (類皮嚢胞), tongue (舌)

緒 言

類皮嚢胞および類表皮嚢胞は、先天的には胎生期の外胚葉組織の迷入、後天的には炎症や外傷などにより迷入した上皮組織に由来すると考えられている軟組織嚢胞で、肛門や卵巣に好発するとされているが、顎口腔領域においても発生する^{1~4)}。顎口腔領域での発生部位は舌下、口底部の正中に好発するとされている^{1~4)}。頬、口唇などにも生じる^{5,6)}が、舌に発生することはまれであり^{7~11)}、なかでも舌根部および舌縁部に発生することはきわめてまれである^{7,9~11)}。今回われわれは、47歳男性の舌根部に発生した類表皮嚢胞の1例を経験したので、その概要と文献的考察を加えて報告する。

症 例

患 者：47歳，男性。
初 診：2013年5月。

主 訴：左側舌根部の腫瘍。

既往歴：特記事項なし。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：2012年10月頃に、左側舌根部に違和感を自覚したため、口腔内を観察したところ、同部に腫瘍を発見した痛みがないため放置していた。2013年4月頃より嚥下時の違和感が生じたため、近在歯科医院を受診した。左側舌根部の白色病変を指摘されたため、精査を勧められ当院を紹介受診した。

現 症：

全身所見：体格中等度。その他特記事項なし。

口腔外所見：顔貌に異常はなく、所属リンパ節に腫大はみられなかった。

口腔内所見：左側舌根部に6 × 4 mm大の境界明瞭な白色弾性軟の広基性腫瘍が認められ、表面は平滑であった(写真1)。腫瘍に波動は触れなかった。また舌扁桃に異常所見はなかった。

臨床診断：舌根部の良性腫瘍の疑い。

処置および経過：上記疾患を疑い画像検査等の精査を勧めるも、患者は同部の違和感が強く切除を希望した。そのため、周囲に約2 mmの安全域を付与して局所麻酔下に切除生検を行った。切除標本は、表面は平滑・黄白色であり(写真2)、断面は嚢胞状で黄白色の内容物を含有していたが、粘液や石灰化物は含まれていなかった。術後の創部治

¹⁾ 大阪歯科大学口腔外科学第二講座
(主任：覚道健治教授)

²⁾ 大阪歯科大学口腔病理学講座
(主任：田中昭男教授)

¹⁾ Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Osaka Dental University (Chief: Prof. KAKUDO Kenji)

²⁾ Department of Oral Pathology, Osaka Dental University
(Chief: Prof. TANAKA Akio)

受付日：2014年9月29日

採択日：2015年5月26日

写真1 初診時口腔内写真
左側舌根部に6 mm程度の広基性の腫瘍を認める(矢印)。

写真2 摘出標本
摘出標本は表面平滑で黄白色である。

癒は良好で、舌の運動障害、知覚異常は認めず、術後1年が経過したが、再発の徴候は認められない。

病理組織学的所見：隆起した舌粘膜の粘膜下に、角化重層扁平上皮で裏装された嚢胞がみられた。嚢胞腔内に角化変性物を容れ、粘液や石灰化物は含まれていなかった。嚢

写真3 病理組織像(H-E染色)
A：弱拡大×20 B：強拡大×100
嚢胞は角化重層扁平上皮で裏装され、内腔に角化物を含む。

胞上皮は皮膚付属器を伴わず、上皮下にはリンパ組織は認められなかった。また、嚢胞上皮と隣接する小唾液腺の導管上皮との連続性は確認できなかった(写真3A, B)。

病理組織診断：類表皮嚢胞。

考 察

類皮および類表皮嚢胞は外胚葉組織の嵌入によって生じる嚢胞で、口腔領域では口底にしばしばみられる。大野ら¹⁾は、口腔領域の軟組織の嚢胞のうち、類皮および類表皮嚢胞の占める割合は6.6% (46例/700例)で、そのなかでも舌に発生したものは0.3% (2例/700例)と報告しており、非常にまれと考えられる。われわれが渉猟し得た限りでは、舌根部側方および舌縁部に発生した類皮あるいは類表皮嚢胞例は5例で、男性1例、女性4例、年齢は10週から47歳であった。大きさは最大径が2 mmから15 mmであった(表1)。大野ら¹⁾の報告によると顎口腔領域における類皮および類表皮嚢胞の大きさは長径が

表1 舌根部側方および舌縁部に発生した類皮あるいは類表皮嚢胞

No	発表者(発表年)	年齢	性別	部位	最大径(mm)	病理組織型
1	片桐ら(2006)	4	女	左舌根部	15	類表皮嚢胞
2	Smolansky et al(1997)	10週	女	右舌縁	2	類皮嚢胞
3	Miles et al(1997)	10	女	左舌縁	3	類皮嚢胞
4	Ruggieri et al(1994)	12	女	左舌縁	3	類皮嚢胞
5	自験例(2013)	47	男	左舌根部	6	類表皮嚢胞

2 mm から 10cm 程度でさまざまであったが、口底部に発生した嚢胞の大きさは 2 cm 以上であったのに対して、舌に発生した嚢胞は 1 cm 未満と比較的小さく、自験例も 6 mm であった。これは口底部に比較して舌根部側方や舌縁部は自覚的にも病変に気が付きやすい部位であるからと考えられる。

類皮および類表皮嚢胞の成因については先天的なもの、すなわち胎生期に外胚葉の嵌入によって生じるものと、後天的に外傷やその他の原因によって、上皮あるいは表皮の嵌入に由来するものが考えられている。自験例は 47 歳と中年であることと、初診の半年前に初めて舌根部に腫瘤があることを自覚していたことから、外傷などによる後天的な原因である可能性が高いと思われたが、成因については特定できなかった。

治療については、嚢胞の全摘出が最良とされており、再発の可能性はきわめて低いと考えられる^{12,13)}。しかし、小林ら³⁾は摘出した類皮および類表皮嚢胞のうち 2% に再発を認めたと報告している。また、再発症例はいずれも摘出術中に嚢胞壁を損傷した症例にみられ、術後 1 年未満の早期の再発がほとんどであった。覚道ら⁵⁾は多発性に発生した類皮あるいは類表皮嚢胞では小さな嚢胞の存在も十分に考慮して注意深い手術操作が必要であると報告している。自験例においては切除生検を目的に病変の基部にて約 2 mm の安全域を設定して切除したため、全摘出が施行し得た。

自験例では術後 1 年が経過し再発は認められないが、本嚢胞全体のうち数パーセントに癌化を認めたとの報告もある¹⁴⁾ため、今後も慎重な経過観察が必要であると考えられた。

結 語

47 歳男性の左側舌根部に発生したきわめてまれな類表皮嚢胞の 1 例を経験したのでその概要を報告し、文献的に考察した。

本論文に関して、開示すべき利益相反状態はない。

引用文献

- 1) 大野邦博, 曾田忠雄, 他: 口腔領域の類皮嚢胞 50 例の臨床統計ならびに本邦における文献的考察. 日口外誌 25: 842-847, 1979.
- 2) 原田博史, 栗丸美由紀: 口腔領域における類表皮嚢胞および類皮嚢胞の臨床病理学的検討. 日口外誌 41: 878-880, 1995.
- 3) 小林 裕, 木野孔司, 他: 口腔顎顔面領域の類皮嚢胞および類表皮嚢胞の臨床的観察. 口科誌 47: 101-107, 1998.
- 4) 石原茂人, 黒岩裕一郎, 他: 巨大な舌下型類表皮嚢胞の 1 例 — 本邦における報告例との大きさ比較 —. 愛院大歯誌 43: 233-237, 2005.
- 5) 覚道健治, 荒木春美, 他: 上唇に発生した類皮および類表皮嚢胞の 1 例. 日口外誌 32: 1238-1243, 1986.
- 6) 細尾麻衣, 五島秀樹, 他: 口唇部・頬部に発生した類表皮嚢胞の臨床統計的検討. 新潟歯学誌 43: 57-64, 2013.
- 7) 片桐 渉, 千足浩久, 他: 舌根部側方に発生した類表皮嚢胞の 1 例. 日口外誌 52: 334-337, 2006.
- 8) 佐藤 敦, 森 士朗, 他: 嚢胞腔内に木片を含んだ舌類表皮嚢胞の一例. 日口外誌 40: 1166-1168, 1994.
- 9) Smolansky SJ, Cardinal JP, et al: Lingual dermoid cysts. Ear Nose Throat J 58: 11-14, 1979.
- 10) Miles LP, Naidoo LC, et al: Congenital dermoid cyst of the tongue. J Laryngol Otol 111: 1179-1182, 1997.
- 11) Ruggieri M, Tine A, et al: Lateral dermoid cyst of the tongue: case report. Int J Pediatr Otorhinolaryngol 30: 79-84, 1994.
- 12) Flom GS, Donovan TJ, et al: Congenital dermoid cyst of the anterior tongue. Otolaryngol Head Neck Surg 101: 388-391, 1989.
- 13) Myssiorek D, Lee J, et al: Intralingual dermoid cysts: a report of two new cases. Ear Nose Throat J 9: 380-383, 2000.
- 14) Thoma KH: Oral pathology. ed 3, Mosby Co, St Louis, 1960, p 924.